

国際生物多様性の日記念シンポジウム
「森林の生物多様性の保全」
第一部「生物多様性と外来種」
第二部「生物多様性と林業」
シンポジウムレポート



2009年5月22日（金）

早稲田大学小野記念講堂

主催：森林総合研究所・早稲田大学環境総合研究
センター

後援：林野庁・環境省

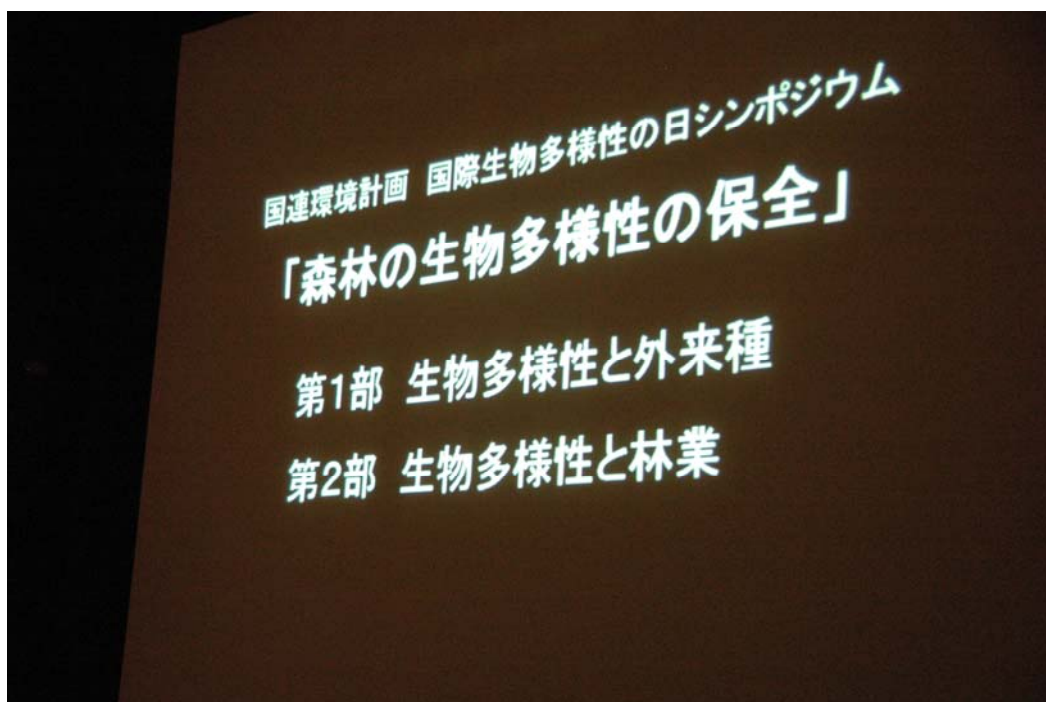


独立行政法人森林総合研究所主催・早稲田大学環境総合研究センター共催の国際生物多様性の日記念シンポジウムは、新型インフルエンザの渦中、早稲田大学小野記念講堂において今年も5月22日に開催されました。

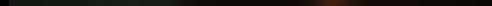


今年は午前10からの開催でしたが、大勢の方々にお越しいただき、ポスター会場では熱心な議論がありました。

シンポジウムでは討論の時間が限られますが、ポスターを前に、様々な専門の方々が情報交換を交えて意見を交わせることは、大変有意義だったと思います。



森林総研と早稲田大・環境総研センターが共催するシンポジウムも、今年で3年目を迎えました。いよいよ来年はCOP10日本開催を控え、私たちは様々な側面から生物多様性の保全を考えてゆく必要があります。今年は生物多様性条約事務局のキーワード「侵入生物」のほかに、森林研究者の取り組まなければならない課題として、「林業と生物多様性」もシンポジウムのテーマに加えました。



午前中は第一部として、外来種に関わる森林総合研究所の研究成果をもとにした講演が行われました。

森林昆虫研究領域の牧野俊一博士は、北海道・青森を除く全国を席卷した「マツクイムシ」は、侵入生物のマツノザイセンチュウが在来のマツノマダラカミキリを伝搬者として利用することによって、爆発的に広がったことを示しました。貴重なマツ林を守るため、カミキリが飛来しない孤立林分を作ることにも試みています。

国際連携推進拠点の杉村乾博士は、奄美の稀少な野生動物が外来生物に生存を脅かされている実態を示しました。一方で研究者や住民の取り組みによって、マングースの影響は軽減されつつあるという明るい情報もありました。

研究担当理事、大河内勇博士は、東洋のガラパゴスともいわれる稀少種の宝庫小笠原でも、外来生物が固有生態系に脅威を与えていることを示しました。しかし外来種の多くは既に生態系の一員であることから、無闇に排除すると、逆に脆弱な生態系が崩壊する懸念があります。そのため生物間相互作用を明らかにし、順応的管理を行う重要性を指摘しました。

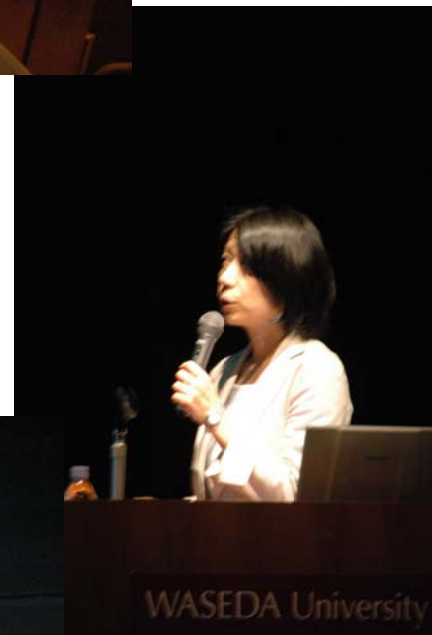
日本のマツはセンチュウに対してなぜ弱いのかという質問に対しては、松枯れはまだ科学的に未解明の部分が多いという回答でした。また小笠原のグリーンアノール根絶によって、在来種のトカゲが減ってしまわないかなどの質問がありました。



午後の部は、中静透博士（東北大学）の基調講演から始まりました。持続的森林管理になぜ生物多様性が必要かという問いに対して、持続性には様々な定義があるが、そのすべてに生物多様性が必要なわけではないことが示されました。生物多様性は特に文化的サービスや調整サービスの害虫制御や花粉媒介などにおいて不可欠であることがわかりました。国際的な生物多様性保全について、条約を始め様々な枠組みが締結あるいは提案されているが必ずしも一つの取り組みで十分ではないのではという意見があり、博士も同意されました。



長池卓男博士（山梨県森林総合研究所）は県有林が森林認証を受けている、林業に対しても保全に対しても意識の高い山梨県の取り組みを中心に、林業と生物多様性の種の多様性との関係について講演しました。間伐などの施業によって林分の種数が増えるかどうかよりも、種数が増えることの意味を考えなければならないことを指摘しました。認証林について質問があり、山梨県はこれまでの環境に対する取り組みの評価としてとらえているが、必ずしも経済性はあがっていないという回答がありました。



休憩後には、岡部貴美子博士（森林総合研究所）による林業によって生態系機能がどう変わるのかと題する講演が行われ、生物多様性によって大きな影響を受ける送粉や天敵などの機能は人工林化によって低下することが示されました。しかし人工林には天然林と異なる種が生息すること、人工林でも構造が複雑化することにより、コリドーなどとして生物多様性保全の機能を果たすことから、生物多様性は地域単位で考え、地域内の森林の複雑さが重要であることがわかりました。どれくらいの複雑さが必要かという質問に対して、異なる森林タイプごとに必要な面積については今後の解明が必要という回答でした。



最後に、山根正伸博士（神奈川県自然環境保全センター）による「人も自然もいきいきとした森をめざして」と題して、水源涵養や木材生産などの個別対策を生態系管理へと方向転換した丹沢自然再生計画の紹介が行われました。丹沢の取り組みでは、生態系管理におけるシカの密度管理の重要性が明らかになってきました。

シカの密度管理についての質問には、全体計画との整合性をとり、4年ごとの計画見直しを行いながら、積極的な管理が行われているという回答がありました。



早稲田大学環境総合研究センターの森川靖教授のとりまとめの講演のあと、パネルディスカッションが行われ、活発に意見を交換しました。

林業が生物多様性に果たす役割は小さいのではないかとという会場からの質問に対しては、林業の生産機能を発揮させ、地域としての多面的機能発揮が重要であるという回答でした。またシカのように今まで想定されなかった問題が出てきたという指摘がありました。生物多様性の重要性に対する疑問については、多様性はこれまで無意識に利用されており、今後は積極的な利用を考えることが重要であるとの回答がありました。参加いただいた皆様、誠にありがとうございました。